

臨床研究にはじめて挑戦する大学院生や指導者のための

学会発表・

医学英語論文執筆の

トリセツ

畑 啓介 著

日本橋室町三井タワー
ミッドタウンクリニック院長
東京大学医学部非常勤講師



本書は

第1章 研究の進め方

第2章 学会発表の方法

第3章 英文論文執筆の方法

の3部構成になっています。

最初から順番に読んで頂いてもよいですし、学会発表をする方は第2章から、英文論文執筆をする方は第3章から読みはじめて頂いても理解できるようになっています。知りたいところだけをつまみ食いして頂いてもよいように、それぞれの項目は簡潔に読み切りで執筆するよう心がけました。

● コラム・英語でコーヒープレイク・TIPS 時短で作成

本文に関連して少し脱線した内容をコラムで紹介しています。

また、英語に関する話題は英語でコーヒープレイクで、時短に関連する内容などはTIPS 時短で作成で触れています。これらの目次は巻頭にまとめてありますので、あとでどこに記載してあったかを調べるのにお役立て下さい。

● 目次の **Case Report** マーク

初めての学会発表や英文論文執筆で症例報告にのぞまれる方は、目次タイトル付近にCase Reportマークのある部分を中心に読んで頂くと、症例報告の学会発表や英文論文執筆に関連した部分を効率良く読んで頂くことができ、他の部分はスキップできるようにしてあります。

● 参考ウェブサイトと参考文献

参考になると考えられるウェブサイトに関しては、QRコードをつけてあります。スマートフォンやタブレットなどのカメラ機能で読み取ることで参照できます。各章の最後にも参考文献とともに参考ウェブサイトをリストアップしてありますので、参考にしてみてください。

POINT

- ・タイトルからは、症例報告の対象症例は6つのパターンに大別される

BMJ Case Reportsに掲載された10,001編のタイトルを分析してみると、どのような症例が報告されているかヒントが得られます。少し科学的に、タイトルに使われている英単語を分析してみます。

① 稀な症例

まずは容易に想像がつく稀な場合です(表1-3)。

これらの形容詞のあとにはcase, complication, presentation, cause, diagnosisが続きます。

いずれもrareに続くパターンが最多ですが、他にunusual cause, unusual case, atypical presentation, unusual presentationといった句が多く使われています。

予想通り**めずらしい症状・所見・原因を呈した症例**が報告されていることがわかります。

表1-3 稀な症例に関する英単語

英単語	使用頻度
rare	1,019
atypical	155
uncommon	89
unexpected	51

② 鑑別診断

表1-4の中でmimicやmasqueradeという単語からは、他の疾患との**鑑別に苦慮した症例**であり**教育的な内容**だということがわかります。presenting asという形も非常に多く、鑑別に苦慮

表1-4 鑑別に関する英単語

英単語	使用頻度
presenting	613
presentation	541
mimicking	146
manifestation	114
masquerading	113

3

口頭発表スライドの
作成方法のTIPS

1 寸劇のごとく一瞬でわかるスライドを!! Case Report

POINT

- メッセージを絞る
- 読めるスライドにする
- グラフ・表を効果的に使う

1枚のスライドが投影される時間はあまり長くありません。オーディエンスが集中していないと理解できないようなスライドでは、多くの人にメッセージを伝えることはできません。多くのオーディエンスにすぐに理解してもらえるようにスライドを作成することが肝要です。そのためには以下の3つのポイントが重要です。

①メッセージを絞る

わかりやすいプレゼンテーションを行うためには、演者自身がオーディエンスに一番伝えたいメッセージが何なのかを考える必要があります。そして、**一般演題であれば結論は1つ(多くても2つまで)にすることが**大切です。たくさんのメッセージを伝えようとする¹と論点がぼやけてしまい、オーディエンスには伝わりません。そのため、**まずは自分の研究の中で何を伝えたいのかをもう一度よく考えてみましょう**。そして、そのメッセージを伝えるためにはどのような項目をスライドに盛り込む必要があります、どのような項目が不要なのかを吟味します。

凡例の表示方法

凡例の使用方法も注意が必要です。Excelでグラフを作成し、そのままPowerPointに貼り付けると凡例の文字やX軸、Y軸の数字がとて小さくなり見えなくなってしまうため、文字はグラフ作成ソフトのデフォルトのままではなく、大きく見えるようにします。

学会発表のグラフで複数のデータを提示する場合に、オーディエンスが短時間で凡例とグラフを見て判断するというのは困難です(図2-8)。

図2-9のように、グループ名をグラフ上に書き込む方法も有効です。

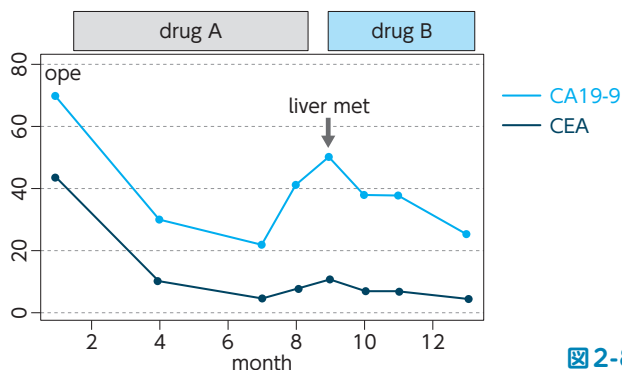


図2-8 凡例を使用

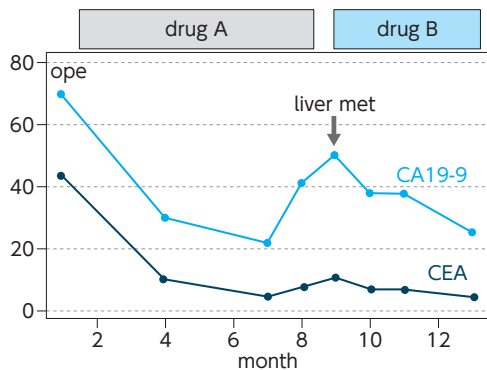


図2-9 凡例を使わず直接図にグループ名を記載



英語でコーヒーブレイク ④

wording

質疑応答での「～と思います」という表現は、いまいちだと思ひます。それよりも「～と考えます」と言ったほうが賢い返答だと考えます。もちろん最も重要なのは内容ですが、言葉使いからもその発表や論文の品格を問われる可能性があるのです。ちょっとした表現方法にも多少はこだわることが大切です。

英語でも同様に、たとえばthinkを使うよりはconsiderを用いるといったwordingでプレゼンテーションの格が変わってくるということが、同時通訳者である関谷英里子さんの本に書かれています⁵⁾。そのほかにもプレゼンテーションの格調を高くする単語が取り上げられていますので、興味のある方は是非読んでみて下さい。さらにhypothesizeやassumeといった単語も使えるようになるとよいですね。

maybeも日本人がよく使う単語のひとつです。頻度を示す言葉は人によって感覚が異なるそうですが、おおむね以下のような頻度順で使用する人が多いと言われています。

maybe < possibly < $\begin{matrix} \text{probably} \\ \text{perhaps (英国人が好む)} \end{matrix}$ < presumably

maybeは「おそらく」というニュアンスよりも、「そうかもね」的な適当に相槌を打ったような印象を与えることが多いようです。あまり多用しないほうが無難と言えます。

2 シンポジウム・パネルディスカッション・ワークショップの違い

POINT

- シンポジウムは完成された発表の場
- パネルディスカッションは討論の場
- ワークショップはアイデア発表の場

シンポジウム・パネルディスカッション・ワークショップは、いずれも主題演目や上級演題とされており、ほとんどの学会では大きな会場が用意され、多くのオーディエンスが入ります。だからと言って一般演題の口演とポスター発表に価値がないというわけではありません。

日本消化器外科学会では、数年前から「学術集会プログラムの定義」に従って、シンポジウム・パネルディスカッション・ワークショップを明確に区別するようになっています。

シンポジウムは完成された研究の発表であるのに対し、ワークショップは仕事を売り出す場として用意されていますので、未完成でも新規性・アイデアに富んだ発表が好まれるとされています。それぞれの演者が発表し終わった後に、前に並んで総合討論を行うのを見たことがあると思いますが、シンポジウムは完成された研究発表なので、このような総合討論は本来行わないのに対し、パネルディスカッションは、あるテーマに対してひな壇に上がった演者が討論をするセッションとなります。パネルディスカッションでは、「演者による一定時間の講演は行わない」と日本消化器外科学会の「学術集会プログラムの定義」には記載されていますが、他の多くの学会ではこれらの違いがあまり明確ではありません。ワークショップやパネルディスカッションはなく、シンポジウムか一般演題かでわけている学会もあれば、シンポジウムのほかにHot topicsや

4 methods執筆の型

POINT

- 基本的に過去形で記載
- 対象患者情報を記載
- 評価項目および統計手法を記載
- 倫理承認に関する記載

methodsは臨床論文では型にはめやすく、書きやすいパートと言えます。まずは対象患者と除外患者に関して記載します。続けて、評価項目、解析方法、倫理承認について、という流れになります。**時制に関しては、methodsのセクションは基本的に過去形で記載します。**

① 対象患者や施設に関する記載

methodsの1段落目には、**患者数**、**病名**、**選択基準**、**除外基準**を記載します。methodsセクションのサブタイトルとしてpatientsとしてまとめている雑誌もあります。患者に関する情報に関しては、5W1H (6W2H)の要素の中で、必要事項を以下のような点を意識して記載するようにします。

What・Who・How many (どのような疾患や条件の患者を何人)

【記載例】

- ……1,000 patients with colorectal cancer.

対象年齢や病気の重症度なども記載します。

6

論文執筆に英語力は必要か？

Case Report

英語が苦手だと英文論文は書けないかという、そのようなことはありません。しかしながら、読み書きがある程度できる英語力はやはり大切です。逆に、どんなに英語が得意な人でも英語が第二言語である限り、英文論文を投稿する際には、ほぼ必ずネイティブのプロ英文校正者に校正を依頼しなくてはなりません。その**校正者にしっかりと意図が伝わるような英文が書ければ、英語自体がパーフェクトでなくてもなんとかなります**。こなれた表現よりはむしろ内容が重要で、これを英文校正者に意図が伝わる形で表現します。理論の展開の方法や型にはまった記述法を理解していれば、英文校正が画竜点睛となって英文論文を完成できると考えられます。

英文校正者に意図を伝える上で、知っておいたほうがよい英語と日本語の違いがあります。一例を挙げると、たとえば日本語と英語の相違点として、以下のように**英語では大切なことを先に言う傾向があります**。

日本語：私は彼が論文を書いているのかどうか知りませんでした。

英語：I **didn't** know whether he was writing a manuscript.

このように、英語ではセンテンスの中でも否定なのかどうかといった重要なポイントが先に示されますが、段落の中でもトピック・センテンスで先に重要なポイントを示します。この点に関しては**第3章1**の冒頭で述べた通りです。

ここからは、英文論文の執筆時に押さえておきたい文法事項に少し触れていきます。